

「古事記を讀む」VI

— 八岐大蛇 —

群馬県立女子大学教授 北川 和 秀

《五穀の起源》(古事記)

又、食物を大氣都比売神に乞ひき。尔くして、大氣都比売、鼻・口と尻とより種々の味物を取り出だして、種々に作り具へて進る時に、速須佐之男命、其の態を立ち伺ひ、穢汚して奉進ると為ひて、乃ち其の大宜津比売神を殺しき。故、殺さえし神の身に生りし物は、頭に蚕生り、二つの目に稲種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に大豆生り。故是に、神産巢日御祖命、茲の成れる種を取らしめき。

《五穀の起源》(日本書紀)

一書に曰はく、伊奘諾尊、三の子に勅任して曰はく、「天照大神は、高天之原を御すべし。月夜見尊は、日に配べて天の事を知すべし。素戔嗚尊は、滄海之原を御すべし」とのたまふ。既にして天照大神、天上に在しまして曰はく、「葦原中国に保食神有りと聞く。爾、月夜見尊、就きて候よ」とのたまふ。月夜見尊、勅を受けて降ります。已に保食神の許に到りたまふ。保食神、乃ち首を廻して国に嚮ひしかば、口より飯出づ。又海に嚮ひしかば、鰭の広・鰭の狭、亦口より出づ。又山に嚮ひしかば、毛の麁・毛の柔、亦口より出づ。夫の品の物悉に備へて、百机に貯へて饗たてまつる。是の時に、月夜見尊、忿然り作色して曰はく、「穢しきかな、鄙しきかな、寧ぞ口より吐れる物を以て、敢へて我に養ふべけむ」とのたまひて、廻ち劍を抜きて撃ち殺しつ。然して後に、復命して、具に其の事を言したまふ。時に天照大神、怒りますこと甚しくして曰はく、「汝は是悪しき神なり。相見じ」とのたまひて、乃ち月夜見尊と、一日一夜、隔て離れて住みたまふ。是の後に、天照大神、復天熊人を遣して往きて看しめたまふ。是の時に、保食神、実に已に死れり。唯し其の神の頂に、牛馬化為る有り。顛の上に粟生れり。眉の上に繭生れり。眼の中に稗生れり。腹の中に稲生れり。陰に麦及び大小豆生れり。天熊人、悉に取り持ち去きて奉進る。時に、天照大神喜びて曰はく、「是の物は、頭見しき蒼生の、食ひて活くべきものなり」とのたまひて、乃ち粟稗麦豆を以ては、陸田種子とす。稲を以ては水田種子とす。又因りて天邑君を定む。即ち其の稲種を以て、始めて天狭田及び長田に殖う。其の秋の垂穎、八握に莫莫然ひて、甚だ快し。又口の裏に繭を含みて、便ち糸抽くこと得たり。此より始めて養蚕の道有り。

古事記	スサノヲ	オホゲツヒメ	頭……蚕 目……稻種 耳……粟 鼻……小豆 陰……麦 尻……大豆	カムムスヒ
日本書紀	ツクヨミ	ウケモチ	頭……牛馬 額……粟 眉……蚕 目……稗 腹……稻 陰……麦・大豆・小豆	アマノクマヒト アマテラス

◎以下、古事記

《八岐大蛇》

故、避り追はえて、出雲国の肥の河上、名は鳥髪といふ地に降りき。此の時に、箸、其の河より流れ下りき。是に、須佐之男命、人其の河上に有りと以為ひて、尋ね覚め上り往けば、老夫と老女と、二人在りて、童女を中に置いて泣けり。尔くして、問ひ賜ひしく、「汝等は、誰ぞ」とひたまひき。故、其の老夫が答へて言ひしく、「僕は国つ神、大山津見神の子ぞ。僕が名は足名椎と謂ひ、妻が名は手名椎と謂ひ、女が名は櫛名田比売と謂ふ」といひき。亦、問ひしく、「汝が哭く由は何ぞ」とひき。答へ白して言ひしく、「我が女は、本より八たりの稚女在りしに、是を、高志の八俣の遠呂智、年ごとに來て喫ひき。今、其が來べき時ぞ。故、泣く」といひき。尔くして、問ひしく、「其の形は、如何に」とひき。答へて白ししく、「彼の目は赤加賀智の如くして、身一つに八つの頭・八つの尾有り。亦、其の身に蘿と櫛・榎と生ひ、其の長さは谿八谷・峽八尾に度りて、其の腹を見れば、悉く常に血え爛れたり」とまをしき。此に赤加賀知と謂へるは、今の酸醬ぞ。

尔くして、速須佐之男命、其の老夫に詔ひしく、「是の、汝が女をば吾に奉らむや」とのりたまひき。答へて白ししく、「恐し。亦、御名を覚らず」とまをしき。尔くして、答へて詔ひしく、「吾は、天照大御神の伊呂勢ぞ。故、今天より降り坐しぬ」とのりたまひき。尔くして、足名椎・手名椎の神の白ししく、「然坐さば、恐し。立奉らむ」とまをしき。尔く

して、速須佐之男命、乃ち湯津爪櫛に其の童女を取り成して、御美豆良に刺して、其の足名椎・手名椎の神に告らししく、「汝等、八塩折の酒を醸み、亦、垣を作り廻し、其の垣に八つの門を作り、門ごとに八つの佐受岐を結び、其の佐受岐ごとに酒船を置きて、船ごとに其の八塩折の酒を盛りて、待て」とのらしき。故、告しし隨に如此設け備へて待つ時に、其の八俣の遠呂智、信に言の如く来て、乃ち船ごとに己が頭を垂れ入れ、其の酒を飲み。是に、飲み酔ひ留り伏して寝ねき。尔くして、速須佐之男命、其の御佩かせる十拳の劍を抜き、其の蛇を切り散ししかば、肥河、血に交りて流れき。故、其の中の尾を切りし時に、御刀の刃毀れき。尔くして、怪しと思ひ、御刀の前を以て刺し割きて見れば、都牟羽の大刀在り。故、此の大刀を取り、異しき物と思ひて、天照大御神に白し上げき。是は草那藝の大刀ぞ。

《須賀の宮》

故是を以て、其の速須佐之男命、宮を造るべき地を出雲国に求めき。尔くして、須賀といふ地に到り坐して、詔はく、「吾、此地に来て、我が御心須賀須賀斯」とのりたまひて、其地に宮を作りて坐しき。故、其地は、今に須賀と云ふ。茲の大神、初め須賀の宮を作りし時に、其地より雲立ち騰りき。尔くして、御歌を作りき。其の歌に曰はく、

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を

是に、其の足名鉄神を喚して、告らして言ひしく、「汝は、我が宮の首に任せむ」といひき。且、名を負はせて稲田宮主須賀之八耳神と号けき。

*参考

世に伝はることは、ひさかたの天にしては、下照姫にはじまり、下照姫とは、天稚御子の妻なり。兄の神の形、岡、谷に映りて、かどやくをよめるえびす歌なるべし。これらは、文字の数もさだまらず、歌のやうにもあらぬことどもなり。あらかねの地にしては、素戔鳴尊よりぞ、起こりける。ちはやぶる神世には、歌の文字もさだまらず、すなほにして、事の心分きがたかりけらし。人の世となりて、素戔鳴尊よりぞ、三十字あまり、一文字はよみける。素戔鳴尊は、天照大神の兄なり。女と住みたまはむとて、出雲国に宮造りしたまふ時に、そのところに、八色の雲の立つを見て、よみたまへるなり。八雲立つ出雲八重垣妻籠めに八重垣作るその八重垣を。

かくてぞ、花をめ、鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ心、ことば多く、さまざまになりける。遠き所も、出で立つ足もとよりはじまりて、年月をわたり、高き山も、麓の塵泥よりなりて、天雲たなびくまで、生ひのぼれるごとくに、この歌も、かくのごとくなるべし。

(『古今集』仮名序)

